

夢中になって続けていけば 絶対に上手になっていくから。



巻頭特集

インタビュー

(児童書作家)

原 ゆたか
さん

今の仕事は、先生がほめてくれたことがきっかけ

小学校三・四年生のころ、絵の先生に「石膏像を作ろう」という課題を出されました。各自、石膏で顔を作り、みんなが肌色に塗っているのに、私は青とか赤とかで面取りして、いろんな色で塗っていた。そうしたら先生が、それをおもしろいと言って8ミリビデオで延々と撮影してくれたことが、すごく嬉しかった思い出として残っています。そのことが自信になって、調子に乗ったみたいですね。

1953年熊本県生まれ。累計3200万部を超える人気シリーズ『かいけつゾロリ』の本を執筆する児童書作家。本嫌いの子どものため、ゾロリだけは読むと言わしめるストーリー展開や表現手法は圧巻。小学生のころ、友人宅にジオラマをつくり、自作の怪獣フィルムを撮影した逸話をもつ。その好奇心いっぱいの瞳に映る学校・先生・子どもとは…?

子どもにウケるものには、ウケるヒミツがある！

ゾロリをかくときは、自分が小学生だったときは何が楽しかったか、何がおもしろかったか、ということを取り返って、今、自分が小学生だったら、何が読みたいか、ということを考えてかいています。多くの子どもたちが読んでくれているので、自分が考えたことは正しかったのかなと思う。私の小学生のころと比べても、今の子どもはあんまり変わっていないように感じます。遊ぶおもちゃは進化しているけれど、遊びの本質、おもしろいと感じることは同じなんだよね。



©原ゆたか/ポプラ社

大人が本を薦めるときに、勉強になるから、心が温かくなるからといって難しい本を薦めることが多い。でも、最初に出会う本がおもしろくないと、本自体を嫌いになってしま

うから、「ゾロリ」をかくときには、読んでくれた子が、本当に楽しいと思ってくれるような、お小遣いをためて自分で買いたいと思ってくれるような本にしたいと思う。なので、私の基準は、自分が小学生だったら買う本か、なんです。お説教じみた大人の気持ちではなく、子どもの目線で、クラスメイトに「どうだ！

おもしろいだろう」と見ても、そういう感覚で、自分に嘘をつかずに作品を作っているつもりです。

テレビアニメやゲームのように、「ゾロリ」も先生や大人から受け入れられない時期もあった。でも、子どもたちにウケているものを、何でそんなににおもしろいんだろう、何

でそこにひっかかるんだろう」と分析してみると、そこには必ず何か魅力があるのだと思う。おならとかおやじギャグみたいに大人から見るとくだらないことも、昔を思い出してみると、子どもだったころは、今の大人もおならで笑っていたはずだし、大人にとって聞き慣れたギャグも子どもにとっては新鮮な言葉遊びなんです。

子どもが楽しそうに遊んでいることを否定するのではなく、そういう「子どもの文化」のおもしろさも知った上で、それを利用して勉強を教えあげると、子どもたちもすつと勉強に入っていくと思う。先生方も子どもの遊びをくだらないと毛嫌いせず、うまく取り入れてほしいな。

先生って、『種をまく仕事』だと思っ

学校の先生は子ども一人ひとりの個性を育てていくわけだから、ゆくゆくどんなふうにも成長していくのだろう」というとても楽しみのある仕事だと思っ。先生の授業やひとりで、将来の目標ができたり、大人になった子が「この仕事に就きましたよ」と言って来てくれたり、先生は

子どもたちの『種をまく仕事』だと思っので、すぐやりがいのある仕事なんじゃないかな。

学校は、『社会に飛び立たせる準備』をさせる場所だと思っ。今、私は本をかく仕事をしてますが、好きなことをやっているからこそ、苦しいことも乗り越えられると思っている。将来、辛くても頑張り続けられる仕事に就くには、いちばん興味があるものを一所懸命やれば良くて、オールマイティーになる必要はない。知識はコンピューターやネットで、いくらでも得られるものだしね。社会に出ているプロフェッショナルは、実は意外と常識を知らなくて、一つのことしか得意じゃなかったりする。全てで100点をとるより、本当に好きなこと一つを極めていくと、その分野をどんどん知りたくなっってその勉強がおもしろくなっっていく、結果プロフェッショナルになっっていくのだと思っ。小学校から大学までは、自分にとっての一つを見つめるための準備期間と考えていいと思っ。それぞれの好きなことを見つけれればいいと思っんだよね。

そのためにも、学校ではお勉強を楽しいものだと思っせてほしい。小



撮影：遠藤純

学校現場のことは、私は外から見て
いる立場だから分からないこともあ
りますが、先生自身が楽しんでいな
いと子どももきつと楽しくないと思
う。小学校の先生は、オールマイ
ティ(全教科)にできないといけ
ないから大変でしょうけど、少なく
とも自分の好きだったものは確実に
楽しく教えて伝えてあげられると思
う。理数系が得意な先生の学級の子
どもたちは全員理数科に進みたくな
るくらいに。その子にとってのおも
しろいことを見つけてあげて、

その道に進んで楽しければそれでい
いんじゃないかな。人は、本当に自
分が楽しかったことしかうまく教え
られないような気がします。先生の
好きなことや楽しいことを応用して
うまく授業に取り入れられたらいい
なと思います。

それから、きつと、勉強ができる
人が先生になっていくんですね。

できた人はできるのが当然だと、勉
強が苦手な子の気持ちがあんなか理
解できない。作家も、だいたいは本
が好きだから、本が読めない子の気
持ちが分からないことが多いかもし
れない。気持ちが分からないと、そ
んな子へのアドバイスはなかなか難

しいと思う。私は小学校高学年のこ
ろ、一時期本嫌いになったんだよね。
そのときの気持ちは、忘れないよう
にしているんですよ。

先生も、勉強の苦手な子の痛みを
ちよつと分かってあげて、その子が
興味をもってるところからスツと
入れていつてあげられるといいんだ
ろうけどね。

**子どもの『好き(個性)』を見つ
けて『おもしろい!』に誘う**

34巻目の『かいけつゾロリとなぞ
のまほう少女』という本があります。
魔法使いの卵のネリーちゃんは、「何
でも叶う魔法の杖があれば、勉強な
んてする必要はないよね」と言つて魔
法学校をぬけ出してきました。実はそ
のとき、杖は、もう使い物にならな
くなつていたのですが、それを探す
間に、お花屋さんやパン屋さんなど、
いろんなプロフェッショナルに出会
い、それぞれの仕事は魔法のように
すばらしいものだぞと知ること、自
分も全ての魔法ではなく、一つの魔
法を手に入れればいいんだ」とい
うことに気づく話なんです。

私たち周りの大人は、子どもたち
がネリーちゃんのように、それぞれ

の魔法を一つでも手に入れられるよ
うに、その子の個性を見つけて出して、
うまくおだてて、その道に導いてあ
げられたらいいと思う。

「ものごと」って、ちよつとかじつ
ただけでは本当のおもしろさは分か
らない。どの仕事も自分でおもしろ
くすればおもしろいし、つまらない
と思えばつまらない。どんな仕事を
しても、辛いことはある。楽しいだ
けの、最初からその人にぴつたりと
いう仕事は、そんなないんじゃないか
かな。

子どもたちに、「どつしたら絵本
作家になれるか」とよく聞かれる
けど、「その仕事に就くまでのプロ
セスも一つの仕事だから、自分で考
えてみて」と答えている。私は漫画
好きだから、子どものころからずつ
とかいていたんです。好きだったら、



©原ゆたか/ポプラ社

子どものうちからまねつこでも、何
かやっていると思つし、行動を起こ
しているはず。それをやっているの
が楽しさを見つけているということ。

仕事のような利害関係なしに楽し
んでいることが、ディーブであれば
あるほど、本当に自分はこれが好
きなんだ」と分かつてくる。学校の
先生や親も、子どもを見てい
る中で、
「時間があつという間に経つてい
ると感じているな」と思つものをうま
く見つけてあげて、おだてちゃえば
いいと思つんですね。夢中になつ
て続けていけば絶対に上手になつて
いくから。

**今伝えたい、
学校の先生へのメッセージ**

今でも私は、本物のプロフェッ
ショナルな人に出会つて話を聞くと、
仕事の深さや楽しさが見えてきて
「おもしろそうな仕事だな。次生ま
れ変わつたら、その仕事やってみた
いな」つて思つことがあります。時々
サイン会で、子どもに将来の夢を聞
き「学校の先生になりたい」とい
う答えが返つてくると、「ああ、この
子はいいい先生に出会つたんだな」と、
とても嬉しくなるんです。